

宗教多元時代における宗教間教育の課題と将来

武田龍精

2013年6月22日 龍谷大学大宮学舎清風館

はじめに

1. 宗教多元時代の現代、京都・宗教系大学院連合における宗教間教育の課題と将来という問題を考える場合、もっとも実存的な境位においてはいったい何が問われなければならないのだろうか。
2. 宗教多元時代の時代性（歴史性）がおのれ自身の宗教的実存の根柢にいかにより自覚化されているか。
3. 信仰と教義の領域に深く降りて行かなければ真に応答できないような仕方。
4. 各宗教が歴大な歴史をかけてはじめて到達しえたもっとも深奥なる伝統領域。
5. 相互の宗教的実存の「生の根柢」にまでふれる宗教教育。
6. 西谷啓治の宗教対話論における宗教哲学的思惟。（1997年第10回南山宗教文化研究所シンポジウムにて提言。拙論「浄土教・キリスト教の相互転換における方法論と可能性－親鸞浄土教の視座－」南山宗教文化研究所[編]『キリスト教は仏教から何を学べるか』法蔵館1999）
7. 柳宗悦『宗教とその真理』1917（『柳宗悦全集』第二巻、筑摩書房1981）
 - (i) 既定宗教徒からすれば余は異端者の一人であるといわれるかも知れぬ。しかし名目はいずれでもいい。余は真理への信徒であるのみで充分である。余はたとえばキリスト教の存在がただちに仏教の非認であるとは思わぬ。一宗の存在がただ他宗の排斥によって保たれるのは醜い事実であろう。多くの宗教はそれぞれの色調において美しさがある。しかもかれらは矛盾する美しさではない。野に咲く多くの異なる花は野の美を傷めるであろうか。互いは互いを助けて世界を単調から複合の美に彩るのである。
 - (ii) いずれかに限るのが道に徹する謂ではない。もし要求が二つの教を共に愛そうとするなら、それも真理への新しい道であろう。要求はいつも新しい真理の創造者であった。
 - (iii) 真理の宗教に奉仕する一個の篤い信徒。公明な真理はいつか万民の共産にされねばならぬ。
 - (iv) 余は二つの教を矛盾なく理解し得る道があり得ると信じている。しかもかかる道を徹することに未来の宗教が生れると信じている。余が異なる宗教のいずれにも近づこうとするのは、その中位に止まろうとするためではない。一つの新しい要求による道を徹したいがためだ。ただ在来の道を踏んで一宗に真理を限るこそ、かえって相対に終わる不徹底な態度であろう。

I 宗教多元時代における宗教間教育での真の authentic な出会いが実現可能な実存的状況

8. 同時に相互理解を阻む最も厄介なアポリアが生起してくるまさにその場所。
9. そこではおそらく通常われわれ理解しているような人間の心の最内奥の核心すらもまた突破されなければならないように全く新しい次元へ。
10. われわれの思惟や感情や意志を、不変的と見える既成の枠に閉じ込める、固定的な形式と規範とを思い切って一挙に脱ぎ捨てる。
11. 人間が全き露体であるような、即ち、頭にも背にも何一つまとわず空手裸足、しかし同時に

心の最内奥をも同じく露わに打ち開くことのできるような次元。

12. 科学技術は「<一つの世界>の出現というドラマの主演」であり、種々異なった文化や宗教のあいだの出会いを必然的にひきおこしている。

II 大いなる普遍性の立場

13. 人間生活の徹底的かつ普遍的な世俗化を伴った現在の<一つの世界>の出現をひきおこした源は「隠れた源」である。
14. 東西の真の出会いと相互理解への唯一可能な道とは、「ただ、現代世界の現実の深く複雑な事態そのものに率直真剣に身を曝し、その中から何か新しい出発点をつかむことによるのみ見出されるように思われる。
15. 神学者ヘンリー・ネルソン・ワイマン『人間的善の源泉』*The Source of Human Good*, Chicago: University of Chicago Press, 1946. 37.
16. 広島原爆投下は、歴史を真二つに分けた。それまでとその後では、世界がまったく異なっている。…その投下以前の時代に適合した政治経済秩序は、来るべき時代にとって自殺行為をおこなったのである。同じ破壊的行為は、教育や宗教にまで及んでいる。
17. 仏教が立脚する根本思想の基盤である「生・老・病・死」に対しても根元的なパラダイム・シフトがすでに起こっているという歴史的事実。（拙編人間・科学・宗教 ORC 研究叢書9『核の時代における宗教と平和—科学技術のゆくすえ—』法蔵館 2010）
18. 核戦争がもたらす全人類の破滅。
19. 「核の冬」とよばれる地球上空の汚染と激変。
20. 「核のホロコースト」
21. ゴードン・カウフマン『核時代の神学』*Theology for the Nuclear Age*
22. 晩年の田辺哲学の中心概念である「実存協同」と共に、「死」が深く掘り下げられ、西谷啓治をして「従来の西洋における哲学史上かつて開かれなかった新局面を開いたものであり、その独創性は極めて高い意義をもつものである。」（『西谷啓治著作集』第九巻327）と評せしめた「死の哲学」へと田辺哲学を深化せしめた機縁となっている、原子力時代はまさしく文字通り「死の時代」（京都哲学選書第三巻『懺悔道としての哲学・死の哲学』「メメント モリ」燈影舎 2000、376）であるという田辺の鋭い時代認識に基づく田辺哲学は今後さらに展開されるべきであろう。
23. 「現代においては、諸宗派にとっては勿論、諸宗教にとっても、差別の自覚よりも大同の自覚の方が一層大切であると信ずる。」「各々の宗教における宗教的生そのものが、その生自身の内面から、従来自覚されていた以上に大いなる普遍性の立場を自覚してくる」「人間の永遠なる本質の根底そのものを地盤としたような宗教的な生或いは少なくともその切尖。」「世界霊性史の見地から見て、宗教的生は現在、人間の本質に基づく精神的内容に於いても、実際の歴史的連関に於いても、…一層大きな普遍性の立場に帰るべき境位にある。」（『西谷啓治著作集』第七巻5-7）

III 禅と念仏

24. 上田閑照「エックハルトと禅に通底する或る根源的な経験の位相に、合一の神秘主義を通り抜けたところ、あるいは、合一を突き抜けた非神秘主義ともいうべきあり方を見、その性格を考説し、無神といわれる現代の世界におけるその意義を省察」（『上田閑照集』第八巻「非神秘主義—エックハルトと禅」岩波書店 2002、321）。
25. 「自然法爾の上に正定不退する愚禿としての親鸞の境地に、禅と触れ合うところがないとも言えないであろう。」（『西谷啓治著作集』第七巻7）

IV 宗教多元時代と呼ばれる時代性の自覚化

26. ジョン・ヒックの宗教多元主義

新たなる宗教理解（カントウエル・スミス）にもとづき、ジョン・ヒックは、「存在変革」（「自我中心から実在中心への人間存在の変革」）と「伝統的ダイナミクス」（仏教・キリスト教・イスラム教・ヒンズー教・ユダヤ教・儒教等と従来呼ばれてきたそれぞれの伝統は、けっして同質的な静止の実体などではなく、時間とともに、内在的に高度に異なるものに変化していった、「生きた運動体」として捉え直されてくる。伝統と呼ばれるものは、もはや不変なる固定的実体ではない。「累積的」に、さまざまな異質な要因が邂逅・対決・統合され形成されてきた「内容豊かな複合体」）とのあいだに見出されるだろう思想の選択肢に三つの可能性が考えられるという。すなわち、a.「排他主義」b.「包括主義」c.「多元主義」である。

27. ハーバード大学神学部教授ダイアナ・エック（2009, Gifford Lectures）

- (i) 多元主義はけっして単に多様性のみをいうのではなくて、多様性に積極的かつ果敢にかかわりをもつことである。
- (ii) 多元主義はただ単なる寛容ではない。そうではなく、相違の境界をこえて他者を理解せんとして実践的に探究することである。
- (iii) 多元主義は相対主義ではなく、現実参加の出会いである。われわれのうちにあるもっとも深い差異を、宗教的違いさえも、隔離させ閉鎖させるのではなく、それらさまざまな相違を相互にかかわらせること。
- (iv) 多元主義の言語は、「対話と出会い、対等な条件での交換（give and take）、批判と自己批判、を媒介し伝達する言語」でなければならない。

28. 真に多元主義が成り立つためには、最小限つぎの事柄が前提条件として考慮されていなければならない。（1986年仏教・キリスト教対話国際シンポジウム Theological Encounter with Buddhism. 第三回”Notions of Ultimate Reality in Buddhism and Christianity” Response to Gordon D. Kaufman’s Paper, ‘God and Emptiness.’ にて提言）

- (i) すべての偉大なる諸宗教を、先在的に通底するような究極的実在を、前提的ヴィジョンに据えてはならない。
- (ii) 真の実在は、あらゆる事柄が過去・現在・未来にわたって、一切すべて有機的非実体的連関の網の目のうちに存在するというポスト・モダン的世界観に立たなければならない。
- (iii) 諸宗教は、過去からの特殊的伝統によって限定されながらも、現在から未来への無限なる可能性に対しては常に開かれていなければならない。そこに個々の宗教の新しい創造的主体性が成り立つ。
- (iv) 諸宗教は、世界宗教対話を通して要請される自己変革を閉鎖的に拒絶してはならない。
- (v) そのためには、世界宗教対話への参加も、それからもたらされる自己変革も、他の宗教から強制されるのではなく、自らの宗教が立っている存在根拠からの必然的帰結でなければならない。

V 真理探究的な宗教間対話

29. ゴードン・D・カウフマンが「宗教的多様性と真理問題」（拙編著研究叢書『親鸞思想と現代世界』Ⅱ『親鸞浄土教とキリスト教一聖典翻訳と精神文化の移行、国際化と世界宗教対話、ハーバード大学シンポジウム、龍谷大学創立三五〇年記念シンポジウム』龍谷大学仏教文化研究所 1996、80-96）において論じた宗教多元主義の立場からの宗教的真理に関する五つの命題を掲げておきたい。

- (i) 宗教的真理は、静止的固定的なものではなく、発展する。つねに動的ダイナミック性に

において宗教的真理性は顕彰される。

- (ii) 一つの体系のもとで評価されうるような統一的真理体系があるかのごとく、宗教的真理を単一的なもののみならずとはもはや無意味である。真理の多元主義的概念（あるいは多元主義的真理の概念）が要請されなければならない。
 - (iii) 「財産モデルの真理観」の立場から、「真剣な対話の経験によってもたらされる真理観」の立場へ転換されなければならない。ここには、「対話」は人間的生における創造作用の母体であるという根本命題が前提とされている。「対話」とは、それまでその対話の参加者達が知っていた如何なる真理をも超越した新しい真理を創造する母体である。
 - (iv) 宗教的真理は、数世代にもわたる多様で重層的な諸伝統のうちで生まれ発展してきた歴史的所産であり、本来的に多元的である。
 - (v) 宗教的真理の対話的モデルは、権威主義的・階層的なものでもなく直線的なものでもない。それは本質的に弁証法的であり、徹頭徹尾、民主的で開かれた公共的なものでなければならない。
30. スワミ・ヴィヴェーカーナンダ（1893年にシカゴで開催された「世界宗教会議」の総括）
- もしこの会議が世界に対して、何かを示すことができるとしたら、それはこういったことだろう。神聖さ、純潔さ、博愛は、世界のどのような宗教の独占的な所有物ではないということ、そしてあらゆる宗教がもっとも高貴な性格をもった人々を生み出してきたということを、世界に証明したことである。この証拠を前にしてもまだ自分の宗教のみが生き残り、他の宗教が減びるのを夢見ている者がいるとしたら、私は心の底から彼を憐れむしかない。（Swami Vivekananda, speech for the Parliament of the World's Religions, Chicago, 1893.）